
バカとテストと美晴の兄と。

ラドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと美晴の兄と。

【Nコード】

N8222Z

【作者名】

ラドゥ

【あらすじ】

この話は、個性が豊かすぎる家族を持つ主人公、「清水美樹雄」が送る学園物語である。ただ…
それだけ……。

どうも。最近就活を始めたラドゥです。久しぶりにバカテスを読んでいたら、我慢できずにいつの間にか手が動いてた事実。

…バカテス。恐ろしい子っ！！

まあ、そんなわけで。ラドウ渾身（笑）の三作目。どっぞ。

……あ、更新はあまり期待しないでね

プロローグ『俺の家族はこんな家族』（改）（前書き）

バカテスを読んでたら、いつの間にか手が動いていました。

…おもしろいですよねえ。バカテス。ギャグ物のラノベなら？1だと自分は思っています。異論は認める（キリッ！

…まあ、就活も始まったんであまり更新できませんが。

それではござ

プロローグ『俺の家族はこんな家族』（改）

ここはとある住宅街のとある部屋。

カーテンからは日の光が漏れ、暗い部屋に光をさしこむ。

チュン チュン チュン チュン

雀の鳴き声が、朝の到来を知らせる。

しかしこの部屋の主である、おそらくは十六、七くらいの年齢であろう少年は、

「ZZZZ……。」

いまだに自分のベッドで惰眠を貪っていた。

しかし、それは別段不思議なことではない。朝といっても今の時間は午前5時。少年くらいの年齢なら起きているほうが珍しいのだ。

青年の部屋には大量の本が積み重なっており、この少年がかなりの読書家だということがうかがえる。

そんな少年の部屋に、

ギイイイイ……

何者かが侵入してきた。

「お兄さま。朝ですわよ……。」

ドアをゆっくり開けて入ってきたのは縦ロールをツインテールにしている小柄な少女。どうやらこの少年の妹らしい。

言動から少年を起こしに来たように思えるが、なぜ声を小さくする必要があるのでろうか。

「ふふふ、お兄様はまだ寝ているようですね。」

そついうと少女はゆっくりとベッドに近づくと、少年の顔を覗き込む。

「……グへへ。お兄様の寝顔はやっぱり可愛いですわねえ。」

どうやら彼女の目的は、少年の寝顔を見ることにあつたようだ。

よほど兄のことが大好きなのだろう。だらしなく頬を緩めてる。

というか、仮にも女の子がグへへって……。

「はあ、やっぱり兄の寝顔を見ることは妹の特権ですわね。本当ならもう起こしたほうがいいのでしょうけど。……せっかくなので、もう少し見てみましょう。」

ジーーーーー

「……………」

ジーーーーー

「……………」

「……………」

「…………おい、まてコラ。」

部屋に突然聴こえる男性の声。

現在この部屋には寝ている少年と、その寝ている少年にめけて目を瞑って唇を差し出している妹しかいない。

そして聞こえたのは男性の声なわけで、

「あら、起きたんですのお兄様。おはようございますお兄様。」

少女は瞬時に何も無かったように取り繕う。

「ん。おはようさん美春。ところでお前さん。今なにをしようとしたんだい？」

「あら。今日は入学式のせいで朝がごたつきそうだから、余裕を持って早めに起こしてくれといったのは、お兄様ではないですか。」

「……………そうだったか？」

嘘である。

「ええ。」

「そうか、それはすまなかった。おかげで助かったよ。」

そういつて少年はほほ笑むと、美春という少女の頭の上に手を乗せ、優しく撫でる。

美春はそれに気持ちよさそうに目を細める。

「い、いえ。妹として当然の義務ですわ。」

「ははは、そうかそうか。――…で、本当は？」

「寝ている隙についてお兄様の唇を奪おうとしました。（キリ）」

「――…ほっ？」

ガシッ（少年が美春の頭を掴む音）

ググググ（少年が手に力を込める音）

ミシミシミシ（美春の頭蓋が悲鳴を上げる音）

「ミギヤアアア!?!」

「そういうことはするなといったよなああ!?!」

「ちよっ、お兄様、痛い痛い、いたたたた。ごごご、ごめんなさ

――…い――…」

早朝の住宅街に、少女の音が響き渡った……………。

プロローグ『俺の家族はこんな家族』

「うづう……………。まだ頭が痛みますわね。」

「自業自得だ。朝っぱらから変なことをしようとしたお前が悪い。」

ん？おお、…おはよう。画面の向こうの皆。

俺がだれかって？

俺の名前は清水美樹雄しみず みきお

今年で高校一年生になる、本を読むのが好きなただの一般人だ。

そして今俺の隣で頭を押さえてるのは清水美春しみず みはる。

双子の俺の妹だ。それにしては似てないって？まあ、双子といっても二卵性だからしょうがないだろ。

この美春には、少し困ったところがあつてな。

「何をおっしゃいます、お兄様。兄の唇を奪うのは妹の大切な権利です…！」

ゴチンッ

「~~~~ツ!？」

「んなわけねえだろ。ぶん殴るぞ?」

「も、もう殴ってますわ…。」

そう、この美春。少し、…いや、かなりのブラコンで、気を抜いたら俺に迫ってくるから困る。今朝のなんかまだましなほうで、ときどき入浴中に乱入してきたり、下着姿で俺のベッドの中に潜りこんできたりするから困る。

(なんで、こんな風に育っちゃったんだかねえ…。)

昔はもうちょい普通の子だと思っただが。

「あら、今日は2人とも早いわね?」

おっと、この声は。

「おはよう、母さん」

「おはようございます、お母さん。」

「はい、おはよう2人とも。」

そういつて、台所からこちらを覗くのは、清水美智子しみず みちこ。俺と美春の母親である。

ショートカットの似合う美人だが、一見20代に見えるが、確か今年で、

スパッーン！

「なにか変なこと考えたかしら。」

「ははは んなわけないじゃないですかあ。だから包丁を投げるのはやめてください……。というか次の包丁を構えないでください。」

これから母さんの年齢については考えないようにしよう……。

「手伝おうか、母さん？」

「私も手伝いますわ。」

「あら、じゃあお願いしようかしら？」

そういつて俺と美春は母さんを手伝うために台所に入って行った。

しばらくすると、無事に朝ごはんが出来上がった。

「父さんうるさい。」

「うるさいわよあなた。」

「静かにしなさい、豚野郎。」

「皆、冷たすぎないっ！？特に美春。僕一応君の父親だよ！？」

「お兄様以外の男性なんて知ったことではありませんわ。」

美春晴がそういうと、父さんが人を殺せそうなもの凄い形相で俺のことを睨んでくる。…まあ、父さんは俺のことも大事にしてくれるけど、優先順位は美晴のほうが高いからなあ…。

「おのれ美樹雄…。僕の娘を誑かしたなあ…。」

「んなわけないだろ。とりあえず、……後ろ向いたほうがいいんじゃない？」

「…はっ！」

俺の忠告を聞いてやっと自分の後ろにいる人物の気配を感じたんだろつ。おそろおそろふりかえる。

「……………」

「……………」

そこには母さんがもの凄いオーラをだしながら、無言で立っていた。

「ミ、ミチコサン、イッタイドシタンデスカ…？」

「……………あなた。」

「は、はいっ！…！」

「美春を大切に思うのはいいけれど、美樹雄にあたるのはやめなさいといったわよねえ？」

「え、えっと、それはだな…。」

「少しお話ししましょうか…？」

そういつて母さんは父さんの首元を掴むと、ズルズルと俺たちのいるリビングから父さんを引きづりながらでていった。

その途中、父さんが「ドナドナ」を歌ってたのには涙がでてきた…。

「……………」

「……………」

料理が並べられたリビングに取り残された俺と美春。

……………とりあえず、

「飯にするか。」

「そうですね。」

まあ、こんな人たちが俺の家族。

いろいろ大変なこともあります、毎日家族仲良くやっています!!

「……ツま、まっつ美智子さんッ！さすがに鈍器はダメだと思っただ！？」

「ふふふふ。いつもいつも、暴走ばかりして。あの年頃は繊細なんですから。美樹雄たちがぐれてしまっただらどうするんですか……。今日という今日は、その性根を叩き直してあげます。美晴が美樹雄意外の男性に興味を持たないのも、洗濯物が良く乾かないのも、私の化粧ののりが悪いのも、全部あなたが悪いんです……」

「ちょ、ちょま、少なくとも後ろの二つは関係って、ぎゃあああああああああああああああああ！?!?!?!」

仲……いい……よな……?

プロローグ『俺の家族はこんな家族』（改）（後書き）

どうでしたでしょうか。暇つぶしになれば幸いです。

書き方も少し変えてみたんですが・・やっぱり違和感あるかな。・・

・まあいいか。

ちなみにこの小説は文月学園入学からスタートなので、原作開始まで少し時間がかかります。

…それに就活と、他の連載もあるし。大分遅れるかも…。

それでもいいという人はこれからも生温かい目で見守ってくれたら嬉しいです。

感想に、誤字脱字の指摘、物語の矛盾点など。いろいろお待ちしています。……ただ、あまり激しい悪口なんかはやめてくださいね。自分結構メンタル弱いので…。

それでは、ラドウでした！！

第1話 『文月学園』（前書き）

今回若干の設定ねつ造あります。

ではお楽しみください。

第1話 『文月学園』

サイド：美樹雄（以下ミキオ）

リビングからかわって俺の部屋。

帰ってきた母さんと美春と一緒に朝食を食べ終わった俺（母さんの頬に帰り血のような物がついていたが、見なかったことにした）は、今日の学校に行くために最後の荷物チェックをしていた。

えっと、生徒手帳よし、メモ帳よし、ペンケースよし、財布にハンカチ。ちり紙も持ってる。

制服もさつき鏡で確認したが変なところはない。

こんなもんでいいかな…。

ふとベッドのほうを見ると、ある写真楯が俺の視界に入る。

そのシンプルな意匠の写真楯には、美樹雄を小さくしたような少年と、ピンク色の髪をしたふわふわした感じの少女。そして、整った顔立ちだが、どこか抜けている雰囲気少年が笑顔で映っていた。

写真楯に一切埃がかぶっていないことから、美樹雄がその写真楯を何度も手に取っていることがわかる。それもそうだろう。その写真は美樹雄にとって大切な宝物なのだから…。

「あいつら…。今何してんのかねえ…。」

美樹雄がこの二人と一緒にいた期間は小学生の時の二年間だけだった。写真に写っているピンク髪の少女の髪留め。それを、クラスのとある男の子が取り上げたのが原因だった。

その男の子はがたいのいい、子供のころ必ず一人はいたようなガキ大将で、内気で人とうまく話せなかった少女は格好の餌食だったのだろう。すぐに少女に絡んできて、少女が大切そうに持っていたうさぎの髪留めを取り上げたといったところである。

そこに通りかかったのが俺、清水美樹雄だった。

俺は正義感に溢れた性格：とはいわないが、さすがに同い年の女の子がいじめ紛いのことをされてるのを見ているわけにはいかず、そのガキ大将を追い払って、彼女の髪留めを取り返したというわけである。：まあ俺は仮にも人外染みた戦闘能力を誇る清水一家の間人だ。危ないところもあったが、まあ負けるはずがないので傷をつけないように追い払った。耳元で脅しもしたから先生にチクるところもないだろう。

：まあ、ここまでなら案外普通の話なんだが、ここで終わるわけがないんだなあこれが。

俺は彼女に髪留めを返そうとしたのだが、俺とガキ大将の喧嘩を心配そうに見ていた彼女は緊張が切れてしまったのだろう。急に泣き出してしまったのだ。

そこに通りかかったのがこの写真に写っている、『あいつ』だった。

『あいつ』は泣いている彼女と俺を見るなりいきなり殴りかかってきた。

…いや、確かにこの状況だけ見たら明らかに俺が悪者だが、理由くらい聞こうぜ…。

俺は説得を試みようとしたが、頭に血が上っているようで俺の言葉を全くと言っていいほど聞かず、結局彼女が一生懸命誤解を解いてくれたんだよなあ。まあファーストコンタクトこそ最悪だったが、それが仲良くなって二人と遊ぶようになったんだよなあ…。

でも、父さんの転勤が決まって転校しなくちゃならなくなって。二人とも泣きながらお別れしてくれたっけ…。

この写真はその時に思い出にと、『あいつ』のお姉さんが撮ってくれた写真だ。俺は昔の物は案外あっさり捨てられるがこれだけはどうしても捨てられず今でも大切に持っている。

「本当にどうしてるだろうなあ…。あいつら。」

まあ、『あいつ』は健康に過ごしてるだろうが。「バカ」だし…。

この時、どこかにいる頭の弱い少年がくしゃみをしたのは誰も知らない。

「お兄様あ。そろそろ行きますわよー！」

美春の声に壁に立てかけてある時計を見る。

確かにもういい時間だな。

「わかったー、今行くー!!!」

まあ、父さんが脱サラして喫茶店を開いてくれたおかげでこの町に戻って来れたんだ。運が良ければまた会うこともできるだろう。

そして俺は自分の部屋を出て行った…。

【文月学園】

現在、どこの学校にもない、とある最新の《制度》を試験的に導入した進学校であり、俺と美春が今日から通う学校である。

その学校は急勾配の坂の上に、いや山の上にといったほうがいいのだろうか。とにかくそんな所に建っていた。

この坂を登るのは徒歩でも若干辛いものがある。そこまで急な坂だったので、自転車通学の連中はさぞ大変だろうなあ、と少し同情してしまった。

…でも、今はそんなことより大事なことがある。それは…。

「美春、歩きづらい。」

「我慢してくださいませ。」

「…なんでさ。」

今現在、俺の腕に絡みついてくるこいつをどうにかしなくては…。

さっきいったように、この格好は歩きづらい上に人の目が気になっ
てしょうがない。

いくら兄弟だからって、周りの人はそれを知らないわけだし。変な
誤解を産むようなことは、避けなければならぬ。…そう。避けな

「?なんでですの?」

「危ないからな。」

俺の命が。

美春は訳がわからないという顔をしていたが、もう校門の前に来たためか、割と素直に俺を解放してくれたが、俺への殺気は消えることは無かった。

…俺、この学校に来て良かったのだろうか。

なんか入学初日で転校したい気分になってしまった俺であった。

その時俺は気づかなかった。

「……………」

俺のことを見ていた一人の女性の視線を……………。

きんぐくじほぞん…!

現在入学式が終わって、俺たちはそれぞれに振り分けられた教室にいた。

俺と美春のクラスになり美春が暴れだすという事態もあったが、通りすがった筋骨隆々の教師が取り押さえ連れて行った。…暴走状態の美春を取り押さえたの、母さん意外で初めて見たな…。

「しかし、先生おせえなあ。」

教室に生徒はそれなりに集まってるのだが、いまだこのクラスの教師が来ていなかった。

どうやらこのクラスの担任は学年主任の地位についてるらしく（後から確かめたら先程美春を鎮圧した教師だった）、そのせいで先程の入学式に行われた騒動の後処理に追われているようだ。

実は入学式が行われている途中で男子学生二人が突然乱入してきて（俺は人の壁に阻まれて良く見えなかったが）、ちよつとした騒動となったのだ。その場は美春を取り押さえた教師が鎮圧したようだが、そのせいで入学式の間が台無しになったしまい、そのせいで学年主任の出番となったようだ。

先生も災難だなあ。入学式初っ端からこんなことしなくちゃなんないなんて。

そうそう騒動を起こした例の二人だが、入学式の終わった後に気絶

から目を覚ましたようなのだが、そのまま生徒指導室に連れて行かれたようだ。まあ、文月学園の外部の人間もいる場であんな騒動を起こしたんだ。それくらいはしょうがないだろ。

しかし、暇だなあ…。手持ちの本も全部読んじまったし。

ん……。…。

「寝るか。」

やることもないしなあ。

そうして俺は座っている机に体を預けた…。

「それでは全員そろったな!!」

ハッ!

野太い大声により俺は意識を覚醒させる。

寝ぼけた頭で教室を見回すと全員分の机が埋まっていた。どうやらようやく後処理が終わったようだな。

教卓のほうを見ると、美春が暴走した時にお世話になった筋肉質の教師がいた。どうやらあの先生が俺たちの担任らしい。

（まあ、変な先生が担任になるよりいいかな。それに頼りになりそうだな。）

「事情により予定の時間より遅れたが、これから今後の学園生活についての説明に入る。だがその前にこれからこの教室の面々と君たちは一年間をともにするんだ。まずは自己紹介をしてもらおうか。」

なるほど。確かに何も知らないやつらと一年間を過ごすのはまっぴらごめんだからなま。これは助かる。

「それでは窓側の席から順に自己紹介をしてもらおうか。」

「須川亮です。これからよろしく願います。」

あれから特に際立ったなにかがあるわけでもなく、淡々と自己紹介の順番が進んでいく。

確かに助かるとはいったが、……少し退屈だな。

周りを見渡すとこっさり欠伸をしているやつもちらほら。どうやら退屈なのは俺だけではないらしい。

「シマダ ミナミ です。よろしくお願いします。」

俺がそのままボーっと自己紹介を聞いていたら、なにやら違和感のある自己紹介が聞こえてきた。といつても内容のほうではなく、日本語の発音のほうだが。まるで日本語を習いたての外国人みたいな、そんな感じの声だった。

その声の持ち主を見たが、そこにいたのは思い描いたような外国人ではなく、俺が見慣れた日本人の容姿の少女だった。

すらりと長い手足をしていてポニーテールが特徴的なその少女で、間違いなく美少女の域に入るだろう。……一部が残念な感じだが。

ギランッ！

おっと、どうやら不快なことを感じとったのか睨まれたしまった。俺は焦らずその少女（島田といったか？）から視線を外す。どうやら島田は感が鋭いらしい。あいつに関しては変なこと考えないようになしよう。……そして美春と接触させないようにしなくては。どう見てもあいつのストライクゾーンだし……。

島田も確信があったわけはないようで、首を傾げながら「よろしくお願いします！」と自己紹介を締め切った。

次に立ったのは、たてがみのような髪をした意思の強そうな男子生徒だった。野性的な雰囲気がある。

そいつは慥然とした感じで、

「神無月中出身、坂本雄二だ。」。

たった一言だけの自己紹介だったが、周りはそれだけでわかったようだ。周りからささやき声が聞こえてきた。

耳をすませると、『神無月中の悪鬼羅刹』という単語が聞こえてきた。どうやら有名な不良らしく、少し怯えたような感じをしているやつらもちらほら。

(そんなに危ない奴には見えないがねえ。)

だが本人はそんな評価に慣れてるのか、「フン」と鼻を鳴らし席にのそのそと戻ったいった。

そして次の生徒の自己紹介が始まる。

「木下秀吉じゃ、よろしくたのむ。」

その独特な口調に、思わず自己紹介をしていた人物を凝視する。

(え…、あれ…?)

若干混乱してしまったが、それもしょうがないと思う。だって明らかに女性と見間違っ容姿なのに男子生徒の制服を着ているのだから。

(え、あれ？なんであいつ女子の制服じゃないんだ。男子学生ってことなのかな、名前も秀吉だし…。)

とりあえずこの件については、「男の娘」ということで保留にしよう。

「…今なにやら不本意な理解のされ方をされた気がしたのじゃが。」
気のせいです。

そうして木下の自己紹介が終わり、次に進む。

「……………土屋康太。趣味は盗さ　　何も無い。」

……………え？

「……………特技は盗ちよ　　特にない。」

そう言う彼のポケットにはカメラやレコーダーが見え隠れしていた。

……………ええッ！！

なんだあいつ、趣味は盗撮、特技は盗聴って。思いつきり犯罪じゃねえかッ！！

なんで誰も突っ込まねえの！？え、突っ込んじゃいけないのかこれ。

木下の存在を知った時以上の衝撃が俺を襲っていた。

…なんだこのクラス、キャラ濃すぎだろが。

俺が頭を悩ませていると、「次、清水美樹雄！」という声がおつと、俺の番か。

なにやら「え…。」という声が聞こえたするが気にしないでちゃったとやってしまおう。

ゆっくりと立ち上がり、無難に自己紹介をする。

「清水美樹雄といいます。趣味は読書で、家が喫茶店をやっているのでぜひ来てくださいね？」

ちゃっかり店の宣伝もして、自己紹介を終える。パラパラと社交辞令の拍手が。

それを聞きながら席に座ろうとすると、

ガタタタン！

と慌ただしく立つ音が。

「どうした吉井。」

担任の野太い声が。そうか、今席を立ったのは吉井っていうのか…。

(…………え?)

それは小学生の時に仲良くなった二人の内の一人、『あいつ』と同じ名字。

俺は音がしたほうに首をむけるとそこには、

「ミキオ…?」

八年ぶりにあう幼馴染がいた。

セーラー服で。

「……人違いです。」

「ええッ!？」

とぅ〜び〜んてにゅ〜?

第1話 『文月学園』（後書き）

次は清水一家のキャラ設定行きます。

以上、ラドウでした!!

キャラ紹介【清水一家】随時更新あり。(前書き)

連投です。といってもキャラ紹介ですが。

設定ねつ造あります。

ではごきげん。

キャラ紹介【清水一家】随時更新あり。

しみず みきお
清水美樹雄

この作品のオリ主。

キャラが濃すぎる家族（特にブラコンが激しい妹）に悩んでおり、自らは清水家唯一の一般人だと自負しているが、暴走した父親や美春を冷静に鎮圧するその人外染みたその戦闘能力は明らかに一般人ではなく彼が清水家の立派な一員だといえる。

清水美春の双子の兄だが、二卵性のためあまり似ていない。しかしやはり双子なので、どちらかというとな顔であり、木下秀吉と同じく何故かくびれができています。

スポーツなどは友達との遊び意外ではあまりやらないが、日々暴走した父親や、美春を相手に戦闘染みたことを行っており、そのせいで体が引き締まっている。

男の娘ということじゃないが、その引き締まった体と、持ち前の女顔から独特な色気がある。女装すれば色気のある大人の女性に変身するが、一度親戚の忘年会の余興として母親にやらされたがあまりのできに父親と美春が襲いかかってきたため今は封印している。

実は小学生の時に明久、瑞希と出会っており二年間同じ時を過ごしていたが、当時まだサラリーマンだった父親の転勤のせいで転校してしまった。

全体的に文系科目が得意だが、全力で勉強すれば理数系でもそれなりにいい点数を取れる。

父の喫茶店を手伝うためそれなりの調理技術を習得しており、かなりうまい。

しみず みはる
清水美春

オリ主、清水美樹雄の妹。

原作では、ツルペタ好きのレスビアンで、男と見ると誰にでも毒舌を吐くほどの男嫌いだ、この作品では実の兄である美樹雄には女性としての感情を持っている。（やっかいなことに）

明久の姉である玲をも超えるブラコンで、実際兄の寢床に下着姿で忍び込んだり、兄の入浴中に突然乱入したりしている。（その度に兄に追い出されたり、母にお仕置きされたりしているが）

初めはそれほどでもなかったのだが、あまりにも娘が好きすぎて暴走している父親から自分を守ってくれる兄を見ていたら、兄を男性として見ている自分に気づいた。

一応明久と瑞希とは面識はあるのだが、明久は兄と一緒に時間を邪魔をする敵、瑞希は兄を横取りしようとするライバルとして認識している。

ちなみに父親を鬱陶しがっており、時に面と向かって「豚野郎」などと呼んでいるがさすがに父親だけあり、心のそこから嫌ってるわけではなく、普段は「お父さん」と呼んでいる。

他は原作通り。

ヒロインもどき。

清水美智子

オリ主の母親で、新しく駅前にできた喫茶店『ラ・ペデイス』の看板娘（笑）。

清水一家にしては珍しい常識人で、夫や娘の奇行に日々悩まされている。しかしその実、オリ主と同じで暴走した夫や美春を鎮圧できる数少ない人物であり、そこはやはり清水一家の一員なのだと感じられる。

ショートカットの似合う美人の女性で、20代でも通じる外見をしている。

特技は料理と投擲で、その特技はきつちりと美春に受け継がれている。（特に投擲ww）

あまりに暴走する夫に嫌気がさし、美春を連れて「夫の傍にいさせると危険なため」度々実家に帰っているが、それでも夫を愛しているためすぐに元の鞘に戻るという行為を繰り返している。（ちなみにこの時夫の手綱を持つのはオリ主の役目である）

清水孝明

オリ主の父親で、新しく駅前にできた喫茶店『ラ・ペデイス』の店

主。

元サラリーマンだが、昔から自分の作った料理を食べる人の顔を見るのが好きで脱サラし、その退職金で喫茶店『ラ・ペディス』を開店した。

孝明がこの町で店を開いたのは、主人公がこの町にいる時が一番楽しそうだったのでこの町にした。

自らの子供を心の底から愛しており、特に美春への溺愛ぶりが度を越しており鬱陶しがられている。

オリ主のことも愛しているが優先順位は美春のほうが上で、美春に懐かれるオリ主を見て、それに八つ当たりをして自らの妻に『オハナシ』されるといふパターンが確立されている。

原作通りに娘を泣かしたり、誑かそうとする物があると暴走し、人外染みた戦闘能力を発揮する。

娘や息子が関わらなければ気のいい中年マスター。

キャラ紹介【清水一家】随時更新あり。(後書き)

設定は随時更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8222z/>

バカとテストと美晴の兄と。

2011年12月28日00時50分発行